



門牌號
3282

昭和十六年三月三日
石澤介吉氏贈寄

年の暮れによそちされかなもの窓小すりて世を以て
いの内はやうにまわるは地中乃は山のまんぶひされ
入の河と一かしと竹と称へ人にもかすまきは
いはまわんまのせりくと夏のあは友とひきの
事を集てらるるあらわらとせりとせりと
カミホリとまともりとまのねまくらと
おきるひまきのもじこそりすれなのがちのれみし
さんとまともとせりとせりとせりとせりと
ひりぬの力もあたはせゆと山の数もととと
てんの山と山と山と山と山と山と山と山と
ぬ是やもととすととととととととととと
也がのみをゆふやのちはととととととととと

三たまへ一かれ、三かまをすかせに日暮とおきに作
て、日もくのひもひるとして日こふあく
入たうちてみまほけられぬすのをとするや姫のま
まもちのわねはんじんをしむす月に有るやの
人より始まきくまうきく名前をしてしからのち太和
乃きのまひととゆき河内れどうさき、さくら夜ふ
すれ鶴走はゆるにあたりよ、御生乃方舟にあん志町
ひ波しきふせきをすかえ、遠きとゆ御
浦み二千里の外とやといひんむちくて山、あれこれる小
島の月夕、うふえをまろりとせひまね詠そうた草吹

家を失つて、小廣の門へ向うて、其の後乃ち

がけて乃ちあさまを唐突に浪の三舟のあつまつ世
育てあきらめじまのゆるたとえよがんか
名残もれづれりとれりともれりと
ぬとむれてゆのゆいせぬく波うかの海を称とも
やひふねの若元行はまうこ萬い寔小埋本とす
候ともうぞとれりとく年とくとそ教とすくとれり
ど人のやきづくはくひばくがくとくとくちとくとく
與て反生をゆく時れ、微せに理本の教るとともに
きことりしや思つる

云のままで死ふる者の名元川
海せせふ、江本と云
人の心もかう見えども昔乃よりと思ひ出らるるにあの方
に鶴の山仰り是もやけふ老とも聞えあうとひのすめきて

古今序 小人之心花^{カキ}

文木集 嘴^{モウ}きのう
モリのむすび門^{ムン}とや
ほあい乃^ノういよこてアキ
カウルヒ
おおでをのまのひ
のうおてもも下
まくひゆきものに
本^{ホン}道^{トウ}

塙川百首

道遠一毛
ナリ老々
只ひとせ
我をまし

新古今御飯
のあらわす

是たは仰ぐるうけ止神を作て篤の山又まうそんと浦より
夕きある夢不思ひとさせよ城と見すと志の川れもさうに
西社をうたしもとせんくわがためしるる

桃源の仙洞の
事

夷にこげある石と木を仰り是、令葉集ふやるうの石あり
そとくことをせよせよ、のくるとやくあは石やばん
しこ名も増田すうね里はまみきいはら小家とす
桜を植ゑ花咲く、諫やうろかを波打むひんはの桜や
がむえりもひきにむづれ

詩經耳棠扁
召伯ノ訟アシ

道祖風俗通云
共工氏之子仔道
游故其死後以

馬祖和名佐倅
乃加長

延喜式神名張奥川吉取郡佐吳殿神社

君乃仰伐が作にては木を植をせりとせんとやうのかも
お庭坐すと訟をせん浦とをほさん邸のゆすはうねへ
那ノ木在彼神乃社もくははまもくとして有旅

丸いぬりやかと育る桜子
思ひきめ族ちのかい林年のとほねの神やれん
木が岩沼と木が河つ花柳がねくはる骨とこうると
りひ出ゆる

ぬきひや二木の木を武隈のちんふこまとがくん
ちかく武隈の神の木、山野とさんすまとくえんまとく
あれが山野とさんすまとくえんまとくえんまとく
行ゆ世の旅まかせ竹野の神やるふのうとくん

玉葉集凡て
宿すよもてて
まれてある門本
心も開かぬと傳

新古今君集十
五本櫻川の碑本
わ乃下に春どももと
家隆

是れあるまゝ山川よりてアラムルアモリヒセナムニエ
アラクシヤハルヒタモルムルルガトトヨヒムサルマツヒ
モロクルルアモリヒタモルムルルガトトヨヒムサルマツヒ
シテ斗ヤヤシトヤルアモリヒタモルムルルガトトヨヒムサル
チモモサヤ謝ウミエモリヒタモルムルルガトトヨヒムサル
繩来シテモリムヌ是ホリモリ次山のちシモモキモの東波
乃ミシテ村すニナリのミソヨリキリシモシタムニ山とよ
ニサシヒ、これと名のミタ夜またの山がまた多ニ仲
キキモリ有リアヤリキリモリキリモリキリモリキリ
シテ是体をミテホレボシノドリミタモリキリモリキリ
アリシトモリアシヒのセフリクルヒトドリモリキリモリ

相あひまきれどもや細石のゆのとひをすみゆめん船の
ゆのわき方に舟岡や少し里のゆいおれりぬやうはくらんの
あめんひづけたるしがのせよやねをばきむじめす日の朝ゆ
おがわれにくわくわくたらんやせんね見ゆとし
くらん尾先思申しりぬままで 公の御船にゆめさせま
やえそ入をくはるふれのとすすかよせりてまわむい長てぬね鳴
たるしきく呼て羽きの船ひ船ひの船も不せよひれやとに船門
とすすめよまつまわきよまたに鷦井とく沙岸の船えぞうたちう
はまたよふるのれと岩あたまのひと御のうちすとる
ら今あつてわくとくとくひ雨や

中世の庵を新たにやう建てるよりは、古風の流すものに似たる様子の如
て、宮から、はま寛十の名前で神社を建立し、是の用

天皇の后を向ひて坐る所の御門より又日午武のそなれ
をへて左を通りて右をまわつて北の御門を出る處まで
あゆむとあるが亦すがのをあゆ白鳥が飛んでゐるやうに
ゆすやかにあつたがひもうちなまくひじらふる
うふまくともかかしをかのるの黒川めをひよと寄りこ
仰ててはまう昔云をほりてをのへん例でまこと
ぬをものよみだりつゝとせひりと國寺のすいひあらひ
今小毛風をもとしちうとつて人をあまくとふ侍にう
きふとすむこの事とを實小説したれさせかへてや傳
んこれうとをなふ毛風のよぶがねひおさすうらをとし
めぬうといふとて

万葉集卷之四
開成の年
（もと）

そのうちれあーのせをもとまのれりあふとて

すてきる岩かせもなちたるがふ根とまとてねの根がりて
花さけぬ辰河にゆきをふ斗人ふそひ根ほ辰河さし
まされ、岸をぬ夜浪の神となつて花が咲んとやしの
國とけむやうてとてにあといてゆくまづねがまくと
白石のをうふと次の山をえ牛なる

ゆるそと花の巻をとすれの山が毛風ひてかけ牛門
をとみたれ、いすせとく、深小のほとに岩とくとさ
人ひとくりぬくも厚次是ハ何がみ工骨とどととまみま
ややむとく唐の人のをとくとんぼうちもかまうや
せん然てこうして城内國がまうねま、彼ことに守の人
みじいのやうてりあまよとひつまくしもと（次國やう
里くはれ出る山体のとあくふ花をむなんもひもう

萬葉集卷之四
開成の年
（もと）

漢書王陽
九折坂車
セト夏

亀井根津
新後権守
左内侍の子と
見えまへ日本
の御子亀井
君也

お詫びをせんにかくもに亀井の法事とあつて宣寺
をさがる所、あれ是はいうとく小昔源延尉乃つまきしれ
つかれの亀井の六郎といふ男めあをあふぐもどり名
はけしりことお詫び是が名をすきよめがれとがくでたけくやしけ
らましたり永きせふ人のよへせりしたのりくされ

まれるあふ例をくまくぞよほは浮舟の名の井のう
圓田乃宿をとるふ寔ふみのましれの重慶役こうひもく
じく御のおつそのはうひとをもくらすとくたる者又も
有のそれきことにものかうたちゆアモソトとくい事のすり出る
あるとこさんをつらむすけられ、何やうゆん

すよ教とがくね年之後方りなむてすむんせーセと

伊達の大本やども爰るんりじ又ハ西海の國とも云し宣人御家

西山と關をひひ龍舟の心の紀れ西海の國
方木の木
うちの跡をさき山の名とさうゆづるまきのさめたる
つちの跡と并せりけんとあふこれかん雪山とよしやうの殿
家の都乃幸山とあかられてまゆうけしる後と子しまよすあ
奈筋のことを南朝をだしてあらの他乃幸山と是をまよふ所
そしんあめ飯といさのほと山とよしやうの名すとしまよすと云
ゆことに彼の女の娘をすばれ居しとくはそのまじが
まく今ふじうてうのひはうじせきの政の後ももくる御ふ
は家の人にさきえのほも無乃もわきじとくればたゞ
く世ふ稀をひき居しこれぞとじひてんかまのまたくま
くくをとてまくとくね西田小さうとく取とまうとく
所小引をすらしとすひやふすう川をとくとくとくとくとく

いまにあはれとせんねふゆひゆゑ

古今
かがいのれ
さうじゆせん
タメ行はば
もくえいもの上波すがふとせんをそゆてよ
をまくの里ちやくをまくつみやわん

詩 菅公の歌

舟と浮車もあつて、りきをとどけたま（乃國事おまんまと
送り乍らちしけ、舟車を嘗するをと極むをあしよまくらわや法子
ゑへて、友をもとて、幸わぬ歎かづく信玄山迎へし

尋も人のものと山風もそれぬもとをやどり柳石も
友のくらう昔よりのよごとてたれい今更めなにへまの
もととねまによみかへて友不取の山やいふまこと
やするうぢりやんすけのしめまと右に人をかひもどりゆく
ちのの友とそれもうすむう跡の山のうちもまくとも

事、計り難く、宿泊するに便。因以て、おせゆる室を立
ル。

狼土 アラモリ

一三七

孟子古文

もう一遠い こちやの君へ 遠の本領をもるまでもせむふ
まもじやまつはす 将軍家の臣田をもあくらうせゆ
そつうとくえ もあましもりきろりゆゑてせよとたまして
もまかわふはまくとまかしき是が民のたとゆひわろく
え風をひきんまくともひなひきぬへしととぎふもく
右ふとしひんの石をさりとま山のキカ布をすくはる
小あもへしまとひまの山ねをもちてそこのものとおもふ
のひくよむりともゐたのこもんと壁てきのい(ハナモリ)
やづれぬままれて人まとうのそむとててくをひぬ(金を
ぬねのき)をつみにま放すおらしはんとねまく下
りて徒歩せよ小めせのうかくさんび夜も出だやふやうぬ
きのよからぬあぢれハカミ、どんもくへくまくのち、もくも

つめはせきと日清ともいふしたるちうのうちも三月
本わうきよ黒木のち井波さひたるとて山越見と云ふ
さみえぬまのむ向夏ちのまき葉山やゆる花のちゆ
善因川の流れがちづくる石川を御とこまうと下りてせせら
うきしすともへまよ地も

備馬案 石川の
三日川の流れがちよりひる石川を御とこまうて下それでよせ
すもの事の
うそもしくもほんまでも
水くわゆる事あれ花園には壁やこれと反る福作の
石生うきかくの山小木食ちてよしんある二件あくの事の
ややうやく物とのねそろどおそれあん面うけうかえて石生うき
定家冬より
むちのふき
山歌をうき
るゑで今き
りうへよし、うきまくの事の
君いれんねと、ねりひくうきと、うきと、もうれねのうき

水くあるまの事は花田川中、浮き水これも又山人福作
て生うるかの山小食ちてよしんあるニ仲葉門の年はの
ややくやくものねそをとよまれあん角けうかみて不くもか
君はれんあとにねひかく寺亥もうれれのくえ
がくひもい(こねまうのつゝく)よもよもよもよも
御月翁(おきのう)がくの山がくます亥翁(いとまく)
生(なま)く入(い)たもてかく(とよ)りとよりとよりとより

の町うちをうつたる者にんぐいことのあらわし
のゆきまきてはりてゆるあらわのゆくと内をと流を
根子町みえすも同どもへきくはあさ川とよ波つそかくが
の秋を山家する謡やげくれぬかく於てめきたてまえゆく
ちるくよ、まのむらすせふと寝乃傳あよを

ハア因毛と申す所の事よりよしと有りてかまうもあらぬがの事
を人の口と申す事ある事大師の口と申す事ありてはなにか
もきよがくありと申ふありてがまくに有り、わのたゞと申した
がまくに有りてせのものか誰もいにせむとかくさん
斯うかふて風とのむとしゆもすてたれどもうに室威みや
うこめくに

うすうす帳たれて半袖うそとて松梅をかざさたる松板
をやおせんたて蓬辭とも舟も豊隆はいのちのまへ五
たるくらひとよあわん内陣にことよしとすてねりとしきく
とももよきて居こねりてれちけたものいはき人の形をこ
えをしたるも何やし官はうのふ西面斗されんわた
くつもくからに田舎ふりへくもあはざれをすの
おりたまうかみてつかみじうきる年ううしてまく

古今
ゆめ内古門の
小二郎の板車
をくみとあい
さん

山風うらあ花のぬきをこそうらぬだらむ向た
せりゑすりて二重柳とし里かづまあたりの福是として
可泊宿の祝意をうやたる室あとす洋室ある門のふ
二而ある板車を云並びんとせあく

古門の板車を詠と立つて二重柳ふとすとくも二重柳

ゆきまがの黒塗は竹内は引くふ岩やのやうすのあきるのと
そとももにけまぬのすむくとほのやくひてりとぬ
世の中の人ふ定こりて岐阜家い名のこすりぐり
あ達のまうそとむかとく崩くまつてとる歌をされ
てにれまんまゆしやく床板や

白葉すする船いのきん壁をあまはせらまはくとすれ
舟やお酒うどんうてゑやとゆくね板ゆとくふとくう
とくらひとく西ふとて入たまて何のくやけにうるをきつ
玉やの君のせふとくとくんがまとたしらけませゆ

木本をうら
もくらはく
てふとく
え隠のれ
寝言

拾遺うらの
苏色うらの
千鳥うらと
方々うらと
全盛

主の意を説くる兵士も力のあん限にはうすとひひの年

月の夜戸と原のちうひちにすくぬ脚をむすりゆがめ
かくこもせけみのりてせとくすりあんづくはまつる
る君の居いをよひれど従ひまじしきの身をあけち

くもうちねづ今世までも名をすてる雪の庵麒麟舞と
くもあくまの歎ふみ秋をゆくみれどわともひんづ
るくもしづく君と医と風か緋と雨ふかと何ひゆして治めゆ
りを危き地脚ひらき復ふとみて剣たゞうちもひな
げやとほひりくふぞくことを

秋のあらうちせり後をそらもすく聖のまよをかことよ
化して諸侯の古とあり年々ますますとしひよんをもや

る食をすくせ清音に涙仰るあはせりうか乃とす
雨をうかうかはして人の死え未ま

みゆく清うの涙のまよがれりまゆれ

山の井出るやうととんと

えりて駆けぬうと山の井のりれりやぢく思ひ
日和の福良をよやこりく小室のえり場ぢるよし篠や彼
の住り下して伏そあそともうとえんう

跡はあし小枝を生むて次王世の神と神かうきよ

歌山を東の日出山をとみひあれまくぶやれたらにうれしき
因みじてまとゆく御内内衣のあらわにいとせの社さんを
わづく神さまからんうとあるまく

東へたるまめ金手の旅衣詫びをのとれとぞとぞ

朗詠
雄劍離暖
秋霜三尺
白氏文集
化作路傍士

春朝のあらねは
かわはりてひこ
のりよかうぢて
うり佐お

可采木集六
アキモツセイ
岩積山影別所
見山井えいせ
辛吾念莫目
玄ふかくさく
をうきぬき

岩槻山のあらゆることをきくと何うる事かと云ふもんをま
寛とえきの井戸とたてておいたとてそれいと鳩の巣ま
次う川のやまと景は浪うともひかるすとむれとぬのけう
らぬすよとあやへや

しきつに夜さん月とおまほの温泉小さるまもれじに
ひれ縞のつとまつてお祀り神もねるねみに送りてく。

かくとも何のまごん旅衣うそへあひのまくわめくら
稀にせばやましにじうてたじわる旅筋ふえどてゆき
連とも何つあがめせうどじあすとまつ次う山石とまく草薙
お扇をくわるもあぢ上人の何をやまを連れうぐ櫻草筋と
手あがむしたがれとけせ、たがるのか、稀くねうや
あうる若きのとやまのゆづみ代玉る菖のね原

そぞうやうな川のむぎやうり色くをかうまこととくしゐ
いやううとひてひちひとえうあ(ぬ古佐の人)三る雨
はますとやうあけうとせううとせうだる御子は
ゑのたるをくわたる何のととあみを遙(おとこ)くじよひう
遠くまほせんかくせんかほせたるかの浦がの右のむす
まの所や船やあんと伝て伝のむうとたちのまくらむられ
てからしてお扇子とてお一ツしすくまくはくとす
をひじゆくおとせんかくせんかくせんかくせんかくせん
にしきうが(うかく)おとせんかくせんかくせんかくせん
かくのをめんりのゆうがくすれいがるあのゆづみを
時ちあるまくうとくみの風かたのねをすり

ことひよされと旅する時より夜里れ社の事と
万葉
下り金の
うるか参の
しづきの下
正も
一様に是をすく依頃にさうすとやむと
早すゆも

待小かく氣うて既せば此處まへた來行
らきそをすゝ國山もすまね
附記にのんほふまくちゆにい事じ加えむ

わくの河へちかくもせんじひの船白川のまぐとえす
物んきてやむとくもせんにあらうるふまの名めまく
あらふもあはゆるの松風乃おきのいわくられせらる
まがのけすも白川やまの松風今さきゆ
さひの明神とや、松風を津鴻の御神を奉すまよし
かくのゆきとそりばくふかれのけな言ふれがそもどき
みのまゐらぬさくふるのつゝくまくわやあらます
らんあくく行きて侍わせり柳こよたてても是、西川
上人の清水流々とあめんむきよし

山家集の書
信水源を抜て
立派にてことを
とくに

うそおせりと人の手かどもいと翁傳すもう一扇との
一羽脚せうきわむけ柳のせしむさんねがほきてまこと
ケリ叶とせんじとんつまぎからすはうたでいさんさむ
かう川て情をうなごほせん

ひのふきひ柳のとみハ路をゆくとえとされや
芦艶鋪場をとをきて鴨のけせん里をほれ玉をこしを波
をくまといまほあうん波の川際えへ度かふえのまし

るまの岸けやまとさのゆれるのとがやいとも

まゆすく河をいりてまめれとうぢをめとすのとが
是もと日光山やとまくらぬすやく津の村たの風をとよてハ
まゆすく河をいりてまめれとうぢをめとすのとが

日のまかと山のけられせまゆすく河をいりてまめれ

大田原の歌をうてゆふ暮れの歌て歌をうてうかひ行月
一百ふもりぬうれいとほなと云うんまつ思ひ出る
あふそも何うりんをせたまひくもる旅の良い
作山をうるふ常川そ

名前をうしてとゆてもうくとま門をりはふおぢらも
外音と川をもやとて荒川の宿を

こけて森の波のさよに石の蔓をいとあ川の宿
因てや宿のまことの波波さんもあもんえいふなけの焼
すまたのう、浦をきるがのとあるけあひ向くる衰する
人ぬ煙草の煙のえはうとせまく(こまく)なり
かうくの波をあしゆ波とすまじやくうれいほひく縮
のまくはうまでのまくはうひはまくはうまくはうなる

赤裳たれ引ひひぬきあわせひやうなれとまむきうけ
一えんするうふくして四の田もすうたよひと泊たまや
竹ん氏家乃波シ有まぬ川とてまそ
是やあたうちねまぬ川の波かどとあはせまん
も江やそあらちうほとまよまよおれてあく花
まゆもがれてよしたのめやさんやさうの身
竹柄ふあみ白ひと被ふももりう席の花あられじ
あいのひまきとてるをうてはくやくとやしりんまの
こくふあにれんふとまよひあてめのわきうみを
りかへけに衣ぬまふかいゆてまのる根引し
るのつ下みじくんがる

まごのくらんちの御もじなの用うるべの事ひやの件
於りひがふことかわらへかのものるまくせんまもは
れうるやまとすみのあふくつづけの時めのやうろ
すゆ次とよしとよもをみて 时むかやあをもじり、まひ
たひとくとそきのぬのりてあるまんのふあえれとひ
のりそくまじてとけられよまえあるれ
んたのうえんまをめでてまきあゆくはんや まくまふも
らをとくとくおやとのあねうじゆせまゆづら形らもとあ
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

東海道のすきは、佐屋町の豆板子のあまやで
四月うさぎの足りを出でたり。いふての豆のじ

將軍の日えに在りて
一
体もあらぬことをひそかにうやうやしくおちにありて
おひやをまかせられながら、ひすみのあらぬふれあひのう
かくも進ひわくはのをまくべきをゆきゆくしこのよわゆ
たをほんじておこなはるとしていたさんます。ふや

まじるにままでやまくをの國乃あをてひえ
ものとてはる所鶴小鳥井のはらう
きんりゆくし君とあはれのやうに差いあひの體立
ふくさんちよきはひあつともせんじ

たまはるの事は終の物とぞ思ひあがむを今一済ゆ
か山乃面白也承りやうりへもくじるのまゝ生みぬよせ山
まくとあきよ一月とおひまですまくしめ古のわざよ

ひつまうんこくじのうれ

筑波山をすりぬけて通へ、施薦のうへしとひづれの角を
まくはづけたる山をすりぬけたる所もいはれんが、

蒙古文

風に吹きの音をひく。波も音えん
対する音の響あつて。印へれ
法のまことある。んそ。原は柱垂れ。花の本邦よ。うみ
やうす。年は日を。見る。あふ。動の音め。おきて
いき。ね。も。ふ。た。ま。す。ゆ。と。それ。ぬ。よ。ても。も。ゆく
と。わ。ひ。う。の。ま。す。か。れ。而。る。行。び。ア。た。ま。く。ふ。じ。あ。む。

うけや残あきのあつたれやうてみせ
一 梅花妻で裁すにまかしとぞとぞとぞ者へあれ
やうれいどるのじうのえあるは鷹葉草館の件うき
ち一流のよきをうながすかるりあはまことのまふ
作れとむくのふけれがのとくうつまわれたまふ
作らんの主の吉代の四ひやまきく斗がまもい
竹うんぐ

主のよふうにすめおとづれよといはのやすとじと
は秋のじるをとくへうれと金ぶねとてと自
れのよし徒みすかぬ何くる自節月主にる今き
夜をこうとひらむれとみますふとひ是るま
捨原とす新井千葉あやさのせいかをあせん

やそ宗良親王のは原ふすもてまかひのあまてせられふ
がくもあれたるすのまもとをふかうてこすれり波や
主のよとくわかしし

日ひ平て表をあらがすのや捨原のひ芝の高
まぢう三浦門をとくふをかさんの方へあしもほ
うちうこじひよがまくそいとひらみわつまくすくあ
まことうそいとねさばうことをうぢりてゆーものじ
せたるやややと賤のあふのれとすふ歳本年明け
あひて日へのよき勢ひうてぢ傳ひこのねふ波く寛
えやまちうんちして牢の牢といたかたもあり
あやうのひう波ふ年をうもあらむうしとくもあく
立まちうそうもまうりそほふをかみだまくとゆく

とてさかやきしる

つすれのや門方豆をめのくに波の漁

あらへ人のよ

とひりもとくとせの音でよかにあらえ
ゆゑにとひりもとくとせの音でよかにあらえ
あらえにとひりもとくとせの音でよかにあらえ
「もの音」といふとひりもとくのちとは「物」といふと
何んを岩場から見えて、あわてて使うとやが
名をひそめさん滿不思議の心とされたりやが
のうとうのいふあがりてかまくおみとどく
のうとうのいふあがりてかまくおみとどく

もの音とひりもとくとせの音でよかにあらえ
そひともとくとせの音でよかにあらえ
多とたとくとせの音のいふとせをうなうて内外のと
げけり何とせをうて風とくまむかに満ちてや何んか
れまくのやれむとゆすのやうがとくとくまくはく
そやまくのまくはくとくとくまくはくとくとくまくはく
草木の花と種と松戸のけくとくとくまくはくとくとくまくはく
た橋ちあるはくとくとくまくはくとくとくまくはく
まくとん神のかくとくとくまくはくとくとくまくはく
かくとくのもとだ鋪金のまくはくとくとくまくはく
はくとくとくまくはくとくとくまくはくとくとくまくはく
せまくとくとくまくはくとくとくまくはくとくとくまくはく

いたりほきぬもはりて旅の奥をとど
内敵ふそくをもつたまうながを旅のよろとひりと
かくらういとせ
おもへるはまくあくとおとさき
おまきれてとまく二日と日夜してわの船と舟とを
そりせみむとたはすとがくとくひるかくとくの
而とくわねのあくわせ吹みあくもくとせ
ちゆくじきれ細にいろうつのりもれ本のとくはのと
すみにせられたまくとくわるのやふくらのとくとく
たれ一ワムクヤエテアんとくとくのとくはのとく
玉のやまきくとくふくとくれやとくとくのとく
このとくがあれ、けすにやうとくとくのとく
けとくとくのとく

列子曰田家ノ部
人ノ行ノ美味シ
日ニ富シラ暖ナリ
上レテ居候シケル
イトシラヌア
マシカレヨイ
カ葉白ニ施
シレタル墨ナル
車セ

とされがゆき山手のいがとをすりておせを内
走を纏ひまき一筋あるくわきのとあるせふい津小
沢きの芥をうるべに野毛れ日影を向くひすと
して 公小奉でけんもうれあれたる人のなくひふ
を傳ひん。

安永六年四月十日

畠中ヨシ忠藤原盛雄記

したばまね志はうすく穀の奥をかづ
や殿ふしきあむらんふほうかが一枝のあらひあや
ひらうきに難く 公もへむはまほきひそなす
小まきすす天す二すこ日ゆてのびてかくまと
うきよを立たむ徒々をかきうつむく津かくわ
むじもむさへかくとまわ組に立ちあつ

